

第二部

荊棘の道で

「禅宗」への批判

序

道元は『正法眼蔵』において、きわめて独自の思想を展開する。それは『弁道話』の叙述からさらに大きく飛躍して、彼自らの言語形式をもちいて表詮した仏の法である。だが、深草の興聖寺から、追われるように越前に移った頃から、その示衆は批判の色合いを濃くする。道元が直接名指して思想的対決をなしたのは、だれの目にも明らかのように、宋代の杜撰すざんの長老たちであるが、その視野には中国本土の禅僧と並んで、相次いで来日した僧たち、および日本の能忍・栄西・円爾えんにやその弟子たちも入ろう。かれらの多くは、臨済宗の諸派に属する人々である。道元と臨済宗などとの思想的違いを言うことは、それが現在の日本臨済宗と日本曹洞宗の浅薄な宗派争いに思われがちで、厳密な学問的究明はあまりなされてこなかったように思う。しかし、ともすれば宗派論争になるからこそ、かえって綿密に学問的に論じられねばならない課題なのではなからうか。とりわけ近年、中国の禅宗についてすぐれた研究が発表されており、その成果を学べば、より広い視野のもとで道元の思想を客観的に見ることもできよう。

『正法眼蔵』を時代的に見れば、禅宗の祖師たちへの批判は、巻を追うごとに強くなるようで、ついに禅宗と袂別するかのような『十二巻本』が書かれる。『十二巻本』を書きはじめて半ばにして逝った道元が、初心にかえって求め続け、おそらくは果し得なかった「禅宗を超えた仏道」へ向かって、我々自身が道得し、実践していくために、なぜ、どのように「禅宗」が批判されたのか、明らかにしておきたいのである。